

# ローマ皇帝 優雅に熱く

古代ローマ帝国の皇帝ティト(ティトゥス)を題材としたモーツァルト作曲のオペラ「皇帝ティトの慈悲」が11月19日と20日、音楽家団体「北海道二期会」によって札幌市教育文化会館(中央区北1西13)を舞台に道内で初演される。20日はダブルキャストの主役皇帝ティトを若手の実力派テノール歌手荏原孝弥(札幌出身)が務める。「オペラに目覚めたきっかけの道二期会で主役をやるのは本当にうれしい。得意のイタリア語で、18世紀の初演当時に近い『本物』のオペラを見たい」と意気込む。

(長道香)

本作は、大噴火が起こった古代ローマの都市ポンペイで災害復旧に尽力した皇帝ティトをモデルに、皇位継承を巡る暗殺未遂事件や複雑に絡み合う恋心を描いたモーツァルト最晩年の作品。イタリア語の全2幕を日本語字幕付きで上演する。

荏原は道教大岩見沢校音楽コースを卒業後、本場イタリアで6年、東京の国立歌劇場オペラ研修所で3年研さんを積み、今春、東京芸大大学院を修了した実力派。長い学習期間を終え、フリーになって初の公演。特別な思いがある」と打ち明ける。19日は道二期会のベテランテノール岡崎正治が皇帝ティト役を担当する。

荏原がオペラに目覚めたきっかけは、14歳の時に道二期会オペラの「トウランドット」に合唱隊で参加したこと。荏原は「当時出演していて、魅了されたテノール歌手が岡崎さんだったので強い縁を感じます」。

作品については「災害から逃れるシーンや皇位継承を巡るシーンなど、災害が頻発し平和ではない今を生きる人が見ても共感できる内容です」と紹介する。

さらに「テノールのなかでも『テノレ・ディ・グラツィア』と呼ばれる優雅な声の特徴のティトは、自分の声にあっている。当時、初演を務めたテノール歌手とレパートリーも似ていて、モーツァルトの求めた音楽が練習していると見えてくる」と手応えを示す。

同作の全幕上演は全国的にもほとんどない。道二期会芸術監督の三部安紀子は「新鮮さのあるものをやりたかった。歴史的な公演です」と話し、「荏原くんはいろんな意味で皇帝ティトにぴったり」と説明する。演出は岩田達宗、音楽は国内外でオペラを指揮する園田隆一郎が札響を指揮する。荏原は、どちらとも初共演で、「園田さんは、知られていないオペラをよみがえらせるスペシャリストです」と喜ぶ。

大ホールで19日は午後6時、20日は午後1時半開演。チケットは全席指定でS1万2千円、S1万円、A8千円、B6千円、C4千円。チケットは札幌・道新プレイガイドなどで発売中。問い合わせは道二期会、電話090・6266・5313へ。

## モーツァルト曲 人気再燃

オペラ「皇帝ティトの慈悲」を解説する講座が今月7日、札幌市教育文化会館で開かれた。

講師の札幌大谷大・千葉潤学長(音楽学)が作曲の経緯を説明した後、2017年に英グラインドボーン音楽祭で上演されたオペラの映像を流しながら音楽的な特徴を指摘した。

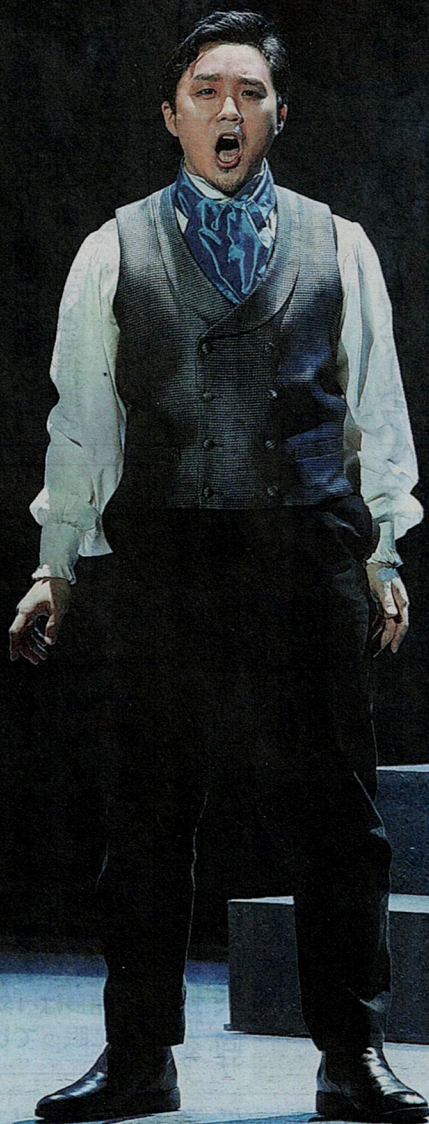
オペラは、モーツァルトが亡くなる3カ月前の1791年9月、レオポルト2世のボヘミア国王として

の戴冠式で初演された。短期間で書かれ、モーツァルトの他作品の音楽素材が再利用されていることから長年、「手抜き作品」と評価されてきた。

千葉学長は「上演が少ないオペラだったが(作曲者の)モーツァルト没後200年の1992年以降、再燃し、欧米ではよく上演されるようになった」と話し、作曲家の手紙をもとに「モーツァルトは(イタリア語で歴史を題材とする)オペラ・セリアを書きたかったので、(国王からの依頼を)喜んで引き受けた」と説明した。(長道香)

来月 札幌出身・荻原孝弥主演

18世紀初演当時のオペラ見せたい



オペラ「皇帝テイトの慈悲」で主役を務める荻原孝弥。写真はオペラ「ドン・ジョバンニ」でドン・オッタービオ役を演じた時の姿。2019年3月、東京・新国立劇場©平田真璃